

創刊期『東亜新報』（一九三九）の文芸・文化記事について

——日本占領下北京の日本語新聞——

Consideration of the articles of Toa Shinpo about literature and Culture in 1939

戸塚麻子

Asako TOTSUKA

（平成二十九年九月八日受理）

抄 録

『東亜新報』は日本占領下の北京で一九三九年から一九四五年まで発行されていた日本語新聞である。北支軍と興亜院が出資する同盟通信社系の新聞であり、北京発行の唯一の日本語新聞として機能した。しかしながら、文芸・文化記事を見ると、時局と連動するような戦意高揚の記事と同時に、国策とは無関係の実にのんびりした記事も少なくない。また、しばしば日本の国策を批判的に見るような言説が紛れ込んでいるのを目にすることもできる。少なくとも太平洋戦争開戦前のこの時期においては、比較的自由な言説が許されていたように思われる。本稿では、創刊期『東亜新報』の中から文芸・文化記事を中心に取り上げ、その内容紹介を試みたい。

キーワード…メディア 国策 日本語文学 北京 『燕京文学』

はじめに

『東亜新報』は日本占領下の北京において、一九三九年七月二日から一九四五年まで発行されていた日本語新聞である（終刊の時期については調査中）。華北に駐留していた北支那方面軍の要請により、同盟通信社が動き、現地の新聞を統廃合して創刊された。軍と興亜院が出資し、株式組織とした。『東亜新報』編集総務であった石川輝は「軍機関係紙色を出してはまずいので株式組織にした」とその理由を説明している。興亜院は中国占領地における日本の行政機関であるから、いわゆる国策紙として創刊が企図されたといえるだろうⁱ⁾。

しかしながら、文芸・文化記事に目を向けると、一方で時局と連動するような戦意高揚の詩歌等が掲載されると同時に、他方であまり関係のない、実にのんびりしたエッセイ・小説等が並んでもいる。さらに、しばしば日本の国策を批判的に見るような言説が紛れ込んでいるのを目にすることもできるだろう。少なくとも太平洋戦争開戦前のこの時期においては、比較的自由な言説が許されていたように思われるⁱⁱ⁾。

本稿では、『東亜新報』一九三九年七月二日の創刊号から一月三日日まで、なかでも文芸・文化関連記事を取り上げ、その内容について述べてみたい。また、いくつかの記事の紹介を行いながら、『東亜新報』の、日本占領下北京における日本語メディアの一斑を明らかにしたい。

一 文芸・文化関連記事の概要

まず、『東亜新報』一九三九年の頁数と構成について述べる。例外を除き、朝刊八頁、夕刊四頁（ただし月曜夕刊は休刊）で構成されている。

七月の基本的な内容は以下の通りである。朝刊一面は、重要なニュースが掲載され、戦況等が報道される。そして左側に無署名の論説（社説）を配置している。二面は、政治外交等が掲載され、特派員等のルポルタージュや論説、軍人や識者による座談会が掲載されることもある。また、「読者欄 巷の弾道」もほぼ毎日掲載。三面は「陣中新聞」である。四面は家庭と学芸を合わせて一頁となっている。連載小説は毎日掲載、文芸コラム「荒鷲ペン」も掲載されることが多い。そのほかでは、評論や随筆を中心に、俳句や短篇小説が載ることもある。また、新刊紹介や書評が時々掲載され、現地発行の著書や雑誌、同人誌が載ることもある。執筆者は日本内地と北京在住者が主である。五面は広告が多い。六面はラジオや囲碁、その他現地生活に関わる記事等。七面は一、二面に載らなかつたニュース。例えば、第一五〇号、一九三九年一月二八日には「崇貞学園文芸会 三日民団で」と題する記事がみえる。ちなみに崇貞学園は清水安三が貧しい中国人少女たちのために朝陽門外に創立した学校であり、記事には四百名の生徒を収容しているとある。八面は経済欄だが、連載小説も掲載。夕刊については、文化関係だけ記すと、二面

に漫画、三面は文化関係が多く、連載のエッセイと講談がある。映画紹介もこの頁に掲載。

八月に入り一箇月経ったところで、随所に見直しが行われた。まず、八月二日「陣中新聞」が三面から六面に移動。また、家庭及び学芸欄は、三日朝刊より「家庭と学芸」の題字がつけられ整備された（それまで欄のタイトルなし）。なお、「陣中新聞」は二月二〇日に四面に移動、「家庭と学芸」も同日六面に移された。以上は、掲載面が変わったのみで、取り上げる内容に大きな変化はない。

八月以降変化した点について述べる。八月一日より「ラジオ」を「ラジオ 北京」とし、欄を拡大。それまで単に番組表があるのみで、題字も小さく見づらい時があったのを改善し、いくつかのプログラムについては内容の詳細が紹介されるようになった。さらに、二月一〇日より「ラジオ 北京・天津」となり、天津のプログラムも掲載されるようになる。ラジオ欄については、次章で述べたい。

そして、八月三日より絵入りコラム「北京百景」の連載が開始される。「北京百景」はその名の通り北京の街を紹介し、『東亜新報』夕刊の顔となった絵入りコラムである。二月二九日まで全一〇回続いた。執筆は、社長の徳光衣城が『東亜新報』創刊に際し呼び寄せた「三羽ガラス」の一人、高木健夫編集総務が担当した（高木は一年後には主筆）。

連載中は無署名で、最終回の第二一〇回の末尾にはじめて

「高木生」と記された。挿絵は千地琇也、野中勲夫、山本寿正の三人が担当。野中と山本は「陣中新聞」にも寄稿しており、他の将兵の詩に挿絵を付けている。そこに記された肩書によれば、野中は軍報道課所属、山本は軍報道課輜重兵一等兵とある。また野中は夕刊二面に漫画「興亜のハリキリ娘」を連載している。

「北京百景」の連載は一九三九年中に終了したが、のち「新版北京横丁」として復活。いつまで続いたかについては今後の調査によるが、少なくとも第一七五二号、一九四四年四月二〇日に「新版北京横丁」九一三回が掲載されていることは確認済みである。その他、「北京百景」「新版北京横丁」については、戸塚麻子・神谷昌史「高木健夫『北京百景』——『東亜新報』掲載時における題目一覧」^{iv}で述べたので本稿では割愛したい。一つだけ付け加えておくと、「新版北京横丁」では、ほぼ毎回社長の徳光衣城自ら俳句を寄せており（筆名以如子）、徳光の句と高木のエッセイ、そして千地琇也の挿絵が一体となって夕刊一面を飾るようになる。

以上は、基本的な構成であり、例外がある。特に、八月三一日（第六二号）より九月一〇日（第七二号）の間、天津で起きた大規模水害により、日本から用紙を供給することができなくなったため、朝刊四面、夕刊四面、ただし日曜日朝刊は従来通り八頁となった（八月三一日朝刊一面、夕刊一面の社告より）。この間、文学・文化関係は全体的に縮小、「陣中

新聞」は「家庭と学芸」と半分ずつ紙面を分け合う形となった。

次章から具体的な記事を紹介しながら、各欄の特色について述べたい。

二 ラジオ欄

先にも述べたように、ラジオ欄では当初北京で放送されていたプログラムのみを記載していた。タイトルの活字も小さく、見つけにくかった。八月に入り、スペースは一気に拡大、内容紹介が掲載されるようになる。

プログラムを見ていくと、講談、落語、漫才、浪曲等の娯楽や音楽、軍人の講演等、さまざまな内容があるが、そのうちの一つを紹介したい。八月九日朝刊八面「ラジオ北京」欄である。

プログラムを見ると、「二〇、〇〇 斉唱と吹奏楽 杉山部隊軍楽隊（１）斉唱 武器なき戦士の歌（八木沼丈夫作 詞黒木篁作曲）（２）吹奏楽 行進曲「宣撫」（以下略）」とある。七月まではこうしたプログラムのみであり、内容がイメージしにくかった。それが、この日はプログラム左側に「宣撫班創設二周年記念 嗚呼木島宣撫官 武器なき戦士の任務は重し」という大きな活字の見出しがあり、内容の説明が掲載される。「武器なき戦士、宣撫班が当地で活躍をはじめ二周年その宣撫工作は陰に陽にどれ程大きな結果を招いて

るか、想像の許されないものがあります今日^{まで}は皆さんと一緒に心からの感謝を捧げて宣撫官諸士の労苦を偲びませう、なお今夜歌はれる武器なき戦士の歌は八木沼宣撫班長の作詞で、本紙掲載が縁となつて黒木軍曹が感激の作曲になるものである」とあり、このあと放送内容のあらすじが続く。

以上の記事から宣撫工作の正当性を、ラジオの電波に乗せてわかりやすく楽しく伝えようとしていることが見て取れるだろう。拡大後のラジオ欄には、毎回このような宣伝に関わるものが紹介されているとは限らず、むしろ一九三九年においては浪曲や講談、童話等、時局とは関係ない娯楽の紹介の方が中心である。だが、こうしたラジオ欄の見直しは、『東亜新報』の読者、すなわち北京を中心とした華北在住の日本人に向けて、国策宣伝を進めていくプロセスと見ることはできるだろう。

ちなみにプログラム全体を眺めると、東京の放送をそのまま流しているものが多い。この日の放送で現地発と思われるものとしては、この宣撫班の特集と「新民体操」、「支那語講座」（初等科）、「夏期速成支那語講座」、「日用品卸値段」などがある。

三 学芸欄（「家庭と学芸」）

続いて学芸欄についてである。家庭と学芸が一頁をほぼ半分ずつ分け合う形になっており、右あるいは上方に家庭、左

または下方に学芸欄という配置になっている。文芸・文化記事が最も多く掲載されるのはこの欄であり、職業作家や著名な文化人等の評論・随筆が載るのもこの頁である。そのなかで、ほぼ毎回掲載されるものとしては、連載小説と文芸コラム「荒鷲ペン」がある。

連載小説について次章で述べることとして、ここでは「荒鷲ペン」について紹介したい。基本的に文学関係が扱われることが多いが、『改造』『中央公論』等総合雑誌で文学以外に言及したものや、特定の雑誌や書籍に拠らず学術の現状について自由に論じたものもある。

執筆者については、「天地人」「幾山河」等といった事実上の匿名、無署名、氏名や筆名が明記されているものが混在している。執筆回数が多い「天地人」「幾山河」（一〇～二〇回）は主に内地の雑誌を読んでの批評が多く、中国色・北京色は見られない。取り上げる雑誌は『文芸』を中心に『改造』『中央公論』等が挙げられる。そのあたりの雑誌は北京に入っていた形跡があるので、彼らが現地の人間である可能性も捨てがたい。だが、『東亜新報』は同盟通信社系であるため、そのルートで北京以外の地域の人間が書いたものを掲載している可能性がある。「荒鷲ペン」の匿名記事が『東亜新報』独自のものか否かについての調査は今後の課題である。

一方、署名記事の中には、しばしば北京在住者の名前を見つけることができる。一九三九年には、「盤太郎」が二回執

筆している。東亜新報学芸記者の江崎盤太郎であり、荒鷲ペン以外の文芸記事も「江崎盤太郎」の名前で執筆している。本名志垣忠、元『北京新聞』記者であり、『北京新聞』が廃刊となり『東亜新報』に統合された際に移った記者の一人である。また、当時北京で唯一の日本語文芸同人誌『燕京文学』の創刊期からの主要同人の一人でもあった。『燕京文学』第二号（一九三九年五月）に発表した「風土に病む家」が芥川賞予選候補となっている。『燕京文学』では江崎盤太郎の名義で書いているが、『東亜新報』には志垣名義の記事もみえる。

それでは、江崎のコラムの一つを紹介する。第三五号、八月四日朝刊三面の「荒鷲ペン」、「霧の夜」の問題」である。

八月号の諸雑誌に読み得る小説一つもなし、と、これも酷言だが「文芸」八月号「霧の夜」には参った。火野上田、と共に戦争三人男と云はれた日比野士朗の帰国第一作を待つてましたとばかりジャーナリズムが取り上げたわけであるらしいが、何とまあ編輯者の頭の悪さよ！と云ひたくなる、なる程日比野も戦争文学（ルポルタージュ）には良い作品を発表した男だつたらう、然し所詮文学とは本質的にかんがりの差異をもつルポルタージュの範囲内においての成功であり、その以前に何等の作家的活動を見せなかつた人らしい上はずつたセンチメントを発見して、それをせめる前に、こうした作品が活字になる時代の文学の墮落を悲しまないではゐられなかつた。

（後略）

日比野士朗は第二次上海事変に従軍し、目の前で親友を失い自らも負傷するという壮絶な体験を経た。それを元に描いた「呉淞クリーグ」等一連の作品で人気作家となる。日比野だけでなく、ルポルターージュが持てはやされる文壇の状況に對し熱く異を唱えているのがこのコラムであろう。この批評の妥当性についてはここでは検討しないが、当時江崎は二四歳、ちょうど芥川賞の選考結果が出たころに書かれたものであり、他の江崎の文章に比べ熱意のこもった若さあふれる批評となっている。

最後に、一九三九年の学芸欄に執筆した文学者・文化人の名前をあげる。まず、内地在住では新居格、浅野晃、倉田百三、中山義秀、窪川鶴次郎、上司小剣等。

続いて北京在住者である。先にも触れた北京で唯一の文芸同人誌『燕京文学』同人が執筆しており、掲載数も多い。『中国文学』同人でもある飯塚朗、後で触れる「清末 お役人語」の翻訳者の一人と推定される深瀬竜、同じく「お役人」の翻訳者で、『燕京文学』編集兼発行人の木田春夫（『燕京文学』での筆名は引田春海）、そして、最も執筆回数が多いのが長野賢である。『燕京文学』では野中修、朝倉康の筆名を用いているが、『東亜新報』では、長野賢、けん・ながの、野中修、朝倉康を用いている。その他哨吟の「王四物語」を訳出しているK・Nもおそらく同一人物であろう。長野賢は

筆名を複数用いているため全体像が掴みにくかったが、『燕京文学』ではほぼ毎号執筆する主力メンバーであった。長野については、拙稿「日本占領下北京の友情と青春―長野賢（野中修・朝倉康）の『燕京文学』掲載小説をめぐって」を参照^{vi}。その他の北京在住者には、立野信之、石橋丑雄、坂井徳三等の名前がみえる。ちなみに坂井徳三はのちに中蘭英助を東亜新報社に記者として入社させた人物であり、『東亜新報』とのつながりも深かったと考えられる。一九四〇年以降は『東亜新報』にしばしば小説を掲載するようになっていく。坂井については本稿の終わりで軽く触れるが、拙稿「坂井徳三『北京の子供』と児童文学」（『教育研究実践報告誌』第一巻第一号、二〇一七年一〇月）を参照。

四 連載小説

最後に連載小説について述べて終わりとしたい。三つの作品が同時進行して掲載されている。うち一本は講談で、「元禄侠唄（きほひうた）」が創刊号の七月二日夕刊四面より開始。その後は基本的に夕刊三面に掲載、年をまたぎ翌年まで続いている。朝刊は小説が二本であり、一九三九年は一つは内地で注目されている作家が担当。橘外男「翹望」が第八号（一九三九年七月八日）より第一二七号（十一月五日）まで。橘は一九三八年に『ナリン殿下への回想』で第七回直木賞を受賞したばかりであった。「翹望」は管見の限り、単行本化は

されていないようである。簡略にあらすじを述べる。

主人公英一と姉美津子は、軍人であった父が突然死亡し、天涯孤独の身となる。父の友人を頼り東京に出るが、友人には息子二人と娘二人がいた。美津子は次男利樹に、英一は次女の満里子に心惹かれるが、長男の俊平は美津子に好意を抱き、しつこく迫る。とうとう耐えられなくなった美津子は、英一と夜逃げして故郷に戻るが、俊平も追ってくる。折しも英一は肋膜炎を病み入院。その間俊平は強引に美津子に迫り、想いを遂げる。病気が治らず気力の弱った英一と美津子は心中を図り、英一のみ命を取り留めた。英一は東京から駆け付けた利樹に世話になりつつ再び自殺の覚悟を固めていく。そんなある日、英一の家には昔からいる爺やが、英一の家にとりついた怨霊のせい、代々みな恋愛に恵まれないのだと語る。利樹は美津子との思い出を胸に英一と暮らすため、逗子に家を建てた。爺やも逗子で英一たちと暮らし、怨霊の宿る家を売り払うことを決意。英一が利樹との生活を選び、満里子との愛をはぐくむのか、あるいは自殺を選ぶのか、というところで話は終わる。

さて、長々とあらすじを示したのは、以下の「作者の言葉」との齟齬を示すためである。

戦ひはつゞけられてゐます、海に陸に忠勇なる我が将士は己が生命を棄て、大君の御為め東亜永遠の平和の礎石となつて屍を大陸の曠野にさらしてゐます、訪ふ人

もなき万里異域の墓標の下に、しずかに眠る尊き英霊の憩ひ！ 其処には幾多清らかな美しい人生の哀詩が空しく地に埋もれてゐることせう、「翹望」一篇はかうした哀詩の一つを私が拾ひあげたものです、そして私はこれに血を通はせ呼吸を吹き込んで銃後国民諸君へ捧ぐるものが、我等作家の御■公の一つではないかと考へてゐるのであります！

以上が、「作者の言葉」全文である。連載第一回の下に「待望 橘氏の巨篇「翹望」を連載 大陸に秘む哀詩を取材」という見出しとともに掲載された。■は判読不能だが、おそらく「奉」であろう。こうした作者の言葉にある、「己が生命を棄て」た「御奉公」は、この作品からはまったく浮かび上がってこない。

また、その後を受けて連載を担当した石川達三の「黄金伝説」も、戦争や国策とは関係のないストーリーである。これも管見の限りでは単行本化されておらず、入手困難であるので梗概を記す。頭脳も明晰とはいえず、愛する女性に全く相手にされない主人公が、チリで巨万の富を築いた伯父の遺産を相続。お金をどんどん使い、社交界にも出入りするようになる。新しくできた恋人の弟を高いサナトリウムに移し……というところで一九三九年の連載は終了し、翌年に続く。このように、一九三九年時点では、ほぼ国策とは無関係の小説が連載されていた。というより、退廃的であり時局にふさわ

しくないと言われかねない作品である。しかしながら、「翹望」の「作者の言葉」に見られるように、国策に沿った内容の作品であることが表面上は掲げられている。このように、『東亜新報』には、しばしば表題や見出し等に国策協力的な言説が選ばれつつも、内容にずれが見られるケースがある。

もう一つの連載は「清末 お役人物語」であり、極めて現地色が強い。七月三日の第三号朝四面より連載開始。李宝嘉原作の『官場原形記』の翻訳であり、「翻訳 燕趙会同人」挿絵は中国人の「李雲子」が担当。初回掲載時に以下のような説明が付されている。「訳者「燕趙会」とは滝川正次郎博士を会長とせる支那学研究の青年学徒十数名のグループにして同人の坂野保夫、栖田^{クニタ}^{マサ}、木田春夫の三氏が訳に当たつてゐる」とある。木田春夫は『燕京文学』編集兼発行人である引田春海の本名、坂野保夫は『燕京文学』同人・深瀬竜と同一人物と推定される。その根拠については拙稿参照^{vi}。なお、『官場原形記』の底本は複数あるので単純な比較はできないが、中国古典文学大系『官場現形記』（上、平凡社、一九六八年一二月）と比べると、「清末 お役人物語」では日本人読者に分かりやすいように官職の名称などが省略されている。また章回小説特有の、今日はここまで、次回をご覧ください、といった文言が削除され、日本の新聞連載に近い形になっている。その分かりやすさは「清末 お役人物語」というタイトルにも象徴されているといえよう。

むすびにかえて

以上、『東亜新報』一九三九年の文芸・文化関係記事について、その概略といくつかの記事の紹介を試みた。現在調査の途中であり不十分な箇所も多いが、今後明らかにしていきたい。

最後に、第二四回、七月二四日朝刊四面の「荒鷲ペン」を紹介してこの稿を閉じたい。「支那文学の課題」と題した坂井徳三署名記事である。「(前略) 事変前の抗日的作品のなかでは、我々は屢々単純なロマンチズムを発見した、それらがどこまでほんとに社会的基礎を持つリアリズムへと発展しうるか、また得たるうか？現在の支那文学の課題はそこにあるう」。

坂井は中国の「事変前の抗日的作品」の「単純なロマンチズム」を批判する。そして、「ほんとに社会的基礎を持つリアリズム」へと発展することを望む。だが、ここで注意したいのは、「抗日的作品」自体の批判や否定はしていないという点である。すなわち、中国の抗日的作品が「単純なロマンチズム」を脱し「ほんとに社会的基礎を持つリアリズム」へと発展したとき、すぐれた文学が生まれるのだ、と説いていると考えられるのである。

風刺詩集『百万人の哄笑』（時局新聞社、一九三六年五月）が発禁処分を受け、その後北京へ脱出した坂井は、北支那開発会社等の国策会社の椅子に座りつつ、しばしば『東亜新報』

その他の日本語メディアに寄稿していた。そこには検閲に抵触しない範囲で書きたいことを書こうとするしただかなまなざしを見ることが出来る。坂井に限らず、『東亜新報』には時局にそぐわなかったり、また批判的に眺めるような言説がしばしば紛れ込む。もちろん書き手個人にもよるが、それを許容する媒体の問題だといえるだろう。

今後は、高木健夫をはじめとする編集部の言説を収集・分析しつつ、『東亜新報』というメディアの実態について考察を行っていきたい。また、その他の華北地域発行のメディアについても調査をすすめ、北京を中心とした日本語メディアの特質について明らかにしていきたいと考えている。

本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C））「日本占領下北京における日本語文学の様相に関する基礎的研究―「東亜新報」を中心」の研究成果の一部である。

i 以上の記述は神谷昌史『東亜新報』研究のためのおぼえがき―創刊期を中心に』（『滋賀文教短期大学紀要』第一八号、二〇一六年三月）を参照した。同論文は『東亜新報』創刊に至る経緯について詳細に論じている。

ii 『東亜新報』における検閲については、神谷前掲論文を参照。
iii 「陣中新聞」は、現地の将兵と銃後を結ぶコーナーであり、

将兵の近況や内地のささやかなニュースが掲載されている。また、将兵からの投稿が多数掲載されている。短歌・俳句を中心に、詩、川柳、歌詞、民謡、随筆や絵、絵入り随筆等がある。神谷昌史は前掲論文のなかで、「陣中新聞」欄について、「大陸文化建設の尖兵」（『創刊の辞』、『東亜新報』第一号、一九三九年七月二日）としてのアイデンティティや、北支軍の機関紙としての性質を示すものであると述べている。

iv 『滋賀文教短期大学紀要』第一九号、二〇一七年三月。

v 『燕京文学』については、拙稿『燕京文学』細目』（『滋賀文教短期大学紀要』第一七号、二〇一五年三月）参照。

vi 『滋賀文教短期大学紀要』第一八号、二〇一六年三月。
vii 前掲「日本占領下北京の友情と青春」、三五頁註9。

